

インターバル

「宇宙のすべてのものは、ある一定のリズムをもって動いている」ということが言われています。この言葉を聞いて、なるほど、1年は365日で地球は太陽の周りを一定の周期で動いている、また、月は地球の周りを約27日の周期で動いていると思われる方が多いと思います。

さて、歴史にもある一定のリズムをもって動いている法則があるという話を聞いたことはありますか？ この説ではアメリカのジョージ・リンジーが次のように語っています。

「知っておくべき数字に**36**、**40**、**56**あるいは**64**、**69**というインターバルがある。人々の意識が高まり活動が活発になったり熱狂したりするが、それはあるインターバルをもって終焉を迎えるというものである。」

なお、リンジーはこのインターバルには前後1の誤差を認めています。

私は、この人々が熱狂し高揚し、そして、終焉を迎える説に興味を抱きいくつかのことを調べてみました。

日本の近代史

日本の近代史をこのインターバルに当てはめると面白いことがわかります。第十五代将軍徳川慶喜が大政奉還を行い明治政府が発足したのは1868年です。長い鎖国時代を終え、日本の近代化は「富国強兵」という軍事力強化、「廃藩置県」による中央集権化、外貨獲得や技術革新を狙った「殖産興業」などの政策を行い国力を上げていきました。当時の世界は日清戦争、日露戦争に勝利した日本に注目せざるえなくなったことでしょう。その日露戦争は1904年2月に始まり、1905年6月の日本海大海戦に勝利し、同年9月のポーツマス講和条約を締結して終結しました。日本は、多くの国民が期待した多額の賠償金を得ることはできませんでしたが、条約では樺太および付属島の日本への譲渡や日本から当時の韓国への指導・監督にロシアが干渉しないことなどが決められました。

客観的に歴史を見ると、明治維新1868年の**37**年後の1905年に日露戦争に勝利を収めたことが熱狂のピークで、その後は長い混乱の時代に入ってしまったと見ることで

きます。その混乱とは満州事変（1932年）、日中戦争（1937年）、太平洋戦争（1941年）、そして1945年の敗戦、また、GHQによる日本統治を経て戦後の経済復興を遂げたのは1954年でした。その後も60年安保闘争や70年安保闘争と安定にはほど遠い混乱の時代が続きました。そして、1970年に日本初の人工衛星の打ち上げに成功し、国家的事業として万国博覧会が開催されました。

1970年に開催された万国博覧会では、

以下 続く